

第 628 回 新潟放送番組審議会 議事録

— 議題 —

テレビ番組

「佐渡の赤土と生きる～人間国宝 伊藤赤水 世界に挑む～」

(5月20日放送分)



平成 29 年 6 月 21 日

BSN新潟放送

第628回新潟放送番組審議会

1. 開催日時 平成29年6月21日（水）午前11：00～

2. 開催場所 新潟市中央区 新潟放送 6F

3. 委員の出席

○委員側出席者(敬称略・順不同)

委 員	相 羽 利 子	委 員	古 賀 豊
委 員	正 道 かほる	委 員	細 田 康
委 員	池 田 幸 博	委 員	小 原 清 文
委 員	小 島 良 子		

○委員側欠席者

委 員	高 木 言 芳	委 員	佐 藤 元
委 員	服 部 誠 司		

○放送事業者側出席者

社 長	竹 石 松 次	放送本部長	島 田 好 久
編成局長	増 山 由美子	情報センター長	大 竹 正 敏

<説明員> 放送本部情報センター 報道部 坂 井 悠 紀

事務局出席者

事務局員 和 田 司 (広報部長)

4. 議 題

1 報告事項 7月の新番組、単発番組について (各局長)

2 審議番組 テレビ番組

「佐渡の赤土と生きる～人間国宝 伊藤赤水 世界に挑む～」
(2017年5月20日(土) 10時30分～11時00分放送分)

5. 議事の概要

各局長からの 2017 年 7 月度番組報告等に続いて、テレビ番組「佐渡の赤土と生きる～人間国宝 伊藤赤水 世界に挑む～」（5 月 20 日放送分）について審議が行われた。

～番組審議委員の主な意見・質問～

- こうしたドキュメンタリー番組を見ると毎度、毎度ながら“私は新潟のことを知らない”と痛感させられる。非常に短い時間で、焼物のこと、主人公の生き方がわかる構成になっている。それぞれのシーンも印象深かった。「作り続けられることが伝統」という言葉が共感できるところだった。
- 無名異焼のことはあまり詳しく知らなかつたが、番組を見て芸術的で感心した。「作り続ける、追加し続ける」ということに感銘を受けた。主人公がニューヨークでもダンディで驚いた。その一方でクールでもあり、情熱を感じられた。気になったところはタイトルに「世界に挑む」とあるが、NY で個展をやることが“世界に挑む”ことなのか？大袈裟ではないかとひっかかつた。
- 正に五代目伊藤赤水の人間性を表現できた番組。非常に高潔である。若い頃のインタビュー映像も入っていて良かった。そして 40 年後の現在と対比して、変わったところ、変わらないところが描かれており、興味深いと感じた。赤土の採土場を撮影できたことは意味がある。“地方からの発信”というよりは“精神的な発信”という風に感じた。
- 良い番組なので、多くの方に見てもらえるよう、番組宣伝を尽くしてほしい。芸術家としての“芯”を持っている反面、さめたクールな面も持ち合わせている主人公の故郷への愛着が描かれている。
- 主人公の人間性が一番、心に残つた。NY では英語がわからないのに“おしゃめ”に振る舞つていて、とてもチャーミングに思つた。「世界に挑む」というタイトルに物凄く期待したが、少し残念な気持ち。というのも NY 個展は凄く大きなチャレンジという印象をタイトルから受けたが、伊藤さんは大きく捉えておらず、ただ前に向かっているという感じで、それはそれで好感が持てた。個展を見た外国人の直後のインタビューがあつたが、数か月経つた後の感想も聞いてみたいと思った。
- 番組では触れられていなかつたが、“六代目”はどうなの？そもそもそういう存在はあるのか？“伝統をどうつなげていくのか”という点も番組の大きなテーマだと思うが、そのあたりが描かれておらず、気になるところだ。
- 「赤土」は重要なキイワード。なのでタイトルの赤土に“あかつち”と平仮名でルビをふられていたら良かったと思った。NY 個展の現場にも、“赤土”を持っていったら

面白かったのでは？と思う。“芸術に終わりはない”という赤水さんの生き様を学ばせていただいた。

～新潟放送 放送本部情報センター報道部 坂井悠紀ディレクターから～

- 貴重なご意見を頂き、ありがとうございます。まずは質問のあった“六代目”ですが、息子さんがいて、いつもは隣の部屋で仕事をしている。NY個展に同行していたら、その姿も番組で露出していたであろうが、実際には同行していないので…。父と息子だが、芸術家同士のアレなのか、「(息子さんは)今回の番組にはちょっと…」ということだった。“地方からの発信”というのは確かに番組制作側が意図したテーマであって、赤水さん自身はそう思っていないのかもしれない。また、「世界に挑む」というタイトルについては、人間国宝という立場の方が海外で個展を開くことはあまり無いと聞いた。評価がどうなるのか？リスクがあるからだ。ただ、本人と話す中で「折に触れ、挑戦したい」という言葉があったので、タイトルにした経緯がある。ご意見を参考に、これからも番組作りを進めていきたい。

【文責・番組審議会事務局】
